なお、「昭和十六年以降　土地建物ニ関スル書類」には昭和十六年九月十日に陳列室を陳列館と改称したと記されており、一時期陳列室と呼ばれていたことがわかる。

③　和田季雄の在外研究、パリ滞在の卒業生たち

昭和三年十二月二十六日、助教授和田季雄は彫刻技術研究のため満二年間フランス在留を命ぜられた。和田は明治十七年四月二十一日東京に生まれ、同三十九年本校に入学、同四十四年彫刻科牙彫部を卒業し、大正十年本校講師兼教務掛となり、「体操」および「彫刻実習」授業を担当、翌十一年に助教授となった。明治三十六年以降軍務に従事し、大正九年には陸軍歩兵中尉となっている。

和田季雄渡欧送別会記念　於倶楽部

（『東京美術学校校友会月報』第27巻第8号より転載）

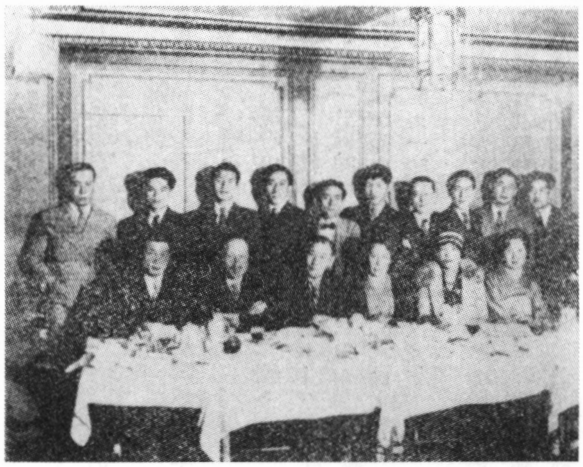
和田は本校校友会において月報編輯主任、文芸部副部長、同臨時部総世話人、乗馬部長、卓球部長、運動部臨時部各部部長として生徒のために尽力していたので、渡欧の際は盛大な送別会が催され、昭和四年二月二十七日、彼が夫人同伴で東京駅を出発した際も大勢の見送りがあった。二十八日神戸より伏見丸に乗船、上海、香港、シンガポール、コロンボ、アデンを経てマルセーユに入港、四月九日にパリに到着した。

和田は帰国後『東京美術学校校友会月報』第三十巻第四、五、六、八号、第三十一巻第二、四～七号に「欧洲紀行」㈠～㈩を寄稿しており、また、同誌の海外消息欄には和田をはじめ、彼と同時期にパリに滞在していた本校卒業生たちの手紙が多数掲載されているので、それらによって滞在中の様子を知ることができる。パリ到着後は矢沢弦月らと日本美術展覧会の準備に忙しい日を送ったらしい。それが済むと美術館、博物館、諸展覧会、遺跡を見学するなどした。彫刻家に師事して学ぶことはなかったようである。秋には十月五日のブールデルの葬儀の模様やパリで九月二十九日に死去した板倉鼎（大正十三年西洋画科卒業）について校友会に書き送り、冬には川村清雄作品のリュクサンブール美術館への入館式（十二月三十日）に列席したことや、装飾美術館のフランス陶器特別陳列のうち、セーブル出品物中に沼田一雅の作が二点出品されていること、一九二九年のサロン・ドートンヌに本校卒業生の長谷川潔、故板倉鼎、小沢秋声、小磯良平、中西利雄、荻須高徳、山田新一、田辺喜規、島村三七雄らが入選したこと、上杜会のパーティーに招かれたことなどを報告している。上杜会についての報告（第二十八巻第八号所載）は次のとおりである。

上杜會の第二回展を、東京と大阪の丸善でやつて、好評だつたと云ふ記事を月報で見て間もなく、その會員の一人で、ポルトサンクルーのわきに居る山口長男君から、上杜會の巴里支部會？

を、近日にするから來てほしいとの通知を受取つた。そう云ふ處へ出る事のすきな小生は、幹事の命令に從つて愚妻を連れて十二月八日定刻、會場の日本人會に行つた。日本人會では、その翌々日から開く在佛日本人の展覽會が有るので、二十數點の繪が壁面をうづめて居ました。

上杜會と云ふのは、御承知でしようが、昭和二年の洋畫出の同窓會なのですが、珍らしく氣の合つた組と見えて、卒業と同時に此の會が生れ、そしてます〳〵團結強く、その上又稀にと云ふよりは、古今未曾有に、その同窓の人達が巴里に澤山來て居る。現在、山口長男君、荻須高德君、藤岡一君、中西利雄君、小磯良平君、小堀四郎君、荻野映彦君、と此の連中と同年に入學して、二年の時退學渡佛して、巴里の繪壇(ママ)に相當名をなして居る高野三三男君を合して八人。古い卒業生では、或は入れ代り立ち代りして之れ位な同級生が、巴里に遊んだ組が有るかもしれないが、同時にしかもまだ若い一組の中から、之れだけの同級生が巴里に落合ふ事は、或は之れから先の連中にも少ないかもしれない。珍らしいと思ふと同時に、惠まれたクラスだと思つて、上杜會員の前途を祝福する。



在巴里上杜会第2回例会記念

(『東京美術学校校友会月報』第29巻第5号より転載)

和田は約一年間パリで過ごした後、昭和五年四月に小堀四郎、田口省吾夫妻らとスペインを旅行し、その後イギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、イタリアを旅行した。この年の夏は期せずして多数の本校関係者がパリに集まったので、七月二十六日には日本人会において校友会のパーティーが開かれた。左記の和田の手紙にはその模様が記されている。

〔上略(高松宮到着記事)〕四月の九日頃に今和次郎氏が來巴され、その後同君は英國をはじめ諸國を旅行し、只今はベルリンに居られます。五月十一日には横山大觀氏夫妻、同十五日に大智勝觀氏が來巴、共に一週間滯在の上歸朝されました。それと入れ代り位に松岡映丘先生、平福百穗氏、長谷川路可氏が着巴、此の方々は相前後して或ひはスペイン、英國、白耳義、和蘭、獨逸、瑞典等を回られて、只今又巴里に御滯在です。六月二日高松宮様と御同船で岡田三郎助先生御夫妻が又巴里に見えられまして、只今

巴里郊外ベルサイユに滞在です。それで此の大先輩方の御來巴を機として、七月二十六日の夕、巴里日本人會で在巴里美校々友會を催しました所未曾有の盛會、二三の旅行中の人を除いて全部出席。

來會者は岡田三郎助先生、同令夫人八千代子様をはじめ卒業年次に書いてみますと、

○明治時代

平福　百穂氏（三二、日）　松岡　映丘氏（三七、日）
稲垣　吉藏氏（三七、彫）　藤田　嗣治氏（四三、西）
和田　季雄氏（四四、彫）

○大正時代

岡見　富雄氏（三、西）　角野判治郎氏（五、西）
鶴見　守雄氏（五、西）　遠田　運藏氏（七、西）
小泉　素彦氏（七、西）　鱸　利彦氏（七、西）
西村　叡氏（八、西）　頓野　保彦氏（八、西）
松岡　銀六氏（九、師）　長谷川路可氏（一〇、日）
山崎　良夫氏（一〇、日）　田口　省吾氏（一〇、西）
園部　邦香氏（一一、西）　佐分　眞氏（一一、西）
岡　鹿之助氏（一三、西）　和田　清氏（一五、西）
後藤　禎二氏（一五、西）　上田　幹一氏（一五、圖）

○昭和時代

山口　長男氏（二、西）　荻須　高德氏（二、西）
中西　利雄氏（二、西）　小堀　四郎氏（二、西）
藤岡　一氏（二、西）　荻野　映彦氏（二、西）
加山　四郎氏（二、西）　天野武吉郎氏（三、西）
三木　辰夫氏（三、西）　中井惣之助氏（三、西）
島村三七雄氏（四、西）　久保　守氏（四、西）
吉井　淳二氏（四、西）　手島　貢氏（四、西）
福井　謙三氏（四、西）　清水　啓三氏（五、西）
矢橋　六郎氏（五、西）

此の外家族として藤田氏令甥芦原氏、和田季雄妻仲子、田口氏夫人信子様、島村氏夫人フサノ様、その外二人

〔中略〕　八月一日

（『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第四号所載鈴川信一宛和田書簡）

和田は昭和六年六月十九日に帰国し、復職。同七年教授となり彫刻科彫刻実習授業を担当し、教務掛主任、生徒主事を兼任した。同八年、シカゴ万国博出品協会より日本館美術工芸部事務担当の依頼を受けて五月から八月にかけて渡米した後、九月三十日付で退官している。なお、和田は正木直彦の妻郁子の弟に当たる。

④ 巴里日本美術展覧会

昭和四年（一九二九）初夏、パリで日本美術展覧会が開催された。正木直彦校長をはじめとする本校関係者の尽力によるところが大きい。これについては黒田鵬心著『巴里の思出』（昭和三十一年、趣味普及会）や正木直彦著「十三松堂閑話録㈢巴里日本美術展覧会図録に序す」（『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第三号に転載）に詳し